

半七捕物帳

三つの声

岡本綺堂

青空文庫

一

芝、田町たまちの鑄掛屋庄五郎が川崎の厄除やくよけ大師へ参詣すると云つて家を出たのは、元治元年三月二十一日の暁方あけがたであつた。もちろんだ帰りの予定であつたから、かれは七ツ（午前四時）頃から飛び起きて身支度をして、春の朝のまだ明け切らないうちに出て行つたのである。

庄五郎の家は女房のお国と小僧の次八との三人暮らしで、主人が川崎まいりに出た以上、きようは商売も休み同様である。ことに七ツを少し過ぎたばかりであるから、表もまだ暗い。これから

すぐに起きては早いと思つたのと、主人の留守に幾らか楽寝らくねする積りであつたのとで、庄五郎が草鞋わらじをはいて出るのを見送つて、女房は表の戸を閉めた。女房は茶の間の六畳に、小僧は台所のわきの三畳に寝ることになつていたので、二人は再びめいめいの寢床にもぐり込んで、あたたかい春のあかつきの眠りをむさぼつていると、やがて表の戸を軽くたたく者があつた。

「庄さん、庄さん」

これに夢を破られて、お国は寢床のなかから寢ぼけた声で答えた。

「内の人はもう出ましたよ」

外ではそれぎり何も云わなかつた。かれを怪しむらしい町内の

犬の声もだんだんに遠くなって、表はひっそりと鎮まった。お国はまた眠ってしまったので、それからどのくらいの時間が過ぎたか知らないが、再び表の戸をたたく音がきこえた。

「おい、おい」

今度はお国は眼をさまさなかつた。二、三度もつづけて叩く音に、小僧の次八がようやく起きたが、かれも夢と現の境にあるような寝ぼけ声で寢床の中から訊きいた。

「誰ですえ」

「おれだ、おれだ。平公は来なかつたか」

それが親方の庄五郎の声であると知って、次八はすぐに答えた。

「平さんは来ませんよ」

外では、そうかと小声で云つたらしかつたが、それぎりで黙つてしまった。眠り盛りの次八は勿論すぐに又眠つたかと思うと間もなく、又もや戸をたたく音がきこえた。今度は叩き方がやや強かつたので、お国も次八も同時に眼を醒ました。

「おかみさん。おかみさん」と、外では呼んだ。

「誰……。藤さんですかえ」と、お国は訊きいた。

「庄さんはどうしました」

「もうさつき出ましたよ」

「はてね」

「逢いませんかえ」

「さつき出たのなら逢いそうなものだが……」と、外では考えて

いるらしかった。

「大木戸で待ちあわせる約束でしょう」と、お国は云った。

「それが逢わねえ。不思議だな」

「平さんに逢いましたか」

「平公にも逢わねえ。あいつもどうしたのかな」

床の中で挨拶もしていられなくなつて、お国は寝衣ねまきのまま起き

て出た。お国はことし二十三の若い女房で、子どもがあだないだけに

年よりも更に若くみえた。表の戸をあけて彼女がその仇めいた寝

乱れ姿をあらわした時、往来はもう薄明るくなつていたので、表

に立っている男の顔は朝の光りに照らされていた。かれは隣り町ちやう

に住んでいる建具屋の藤次郎で、脚絆きやはんに麻裏草履という足ごし

らえをしていた。

「平さんにも逢わず、内の人にも逢わず、みんなは一体どうしたんでしようねえ」と、お国はすこし不安らしく云った。

「まさかおいら一人を置き去りにして、行つてしまった訳でもあるめえが……」と、藤次郎も首をかしげていた。

鑄掛屋の庄五郎は隣り町の藤次郎と露月町ろうげつちやうの平七と三人連

れで、きようは川崎の大師河原へ日がえりで参詣にゆく約束をして、たがいに誘い歩いているのは面倒であるから、七ツ半までに高輪たかなわの大木戸へ行つて待ちあわせるということになっていたのである。その三人のうちで藤次郎が一番さきに出て行つたらしく、大木戸のあたりに他の二人の姿がまだ見えないので、しばらくそ

こちらに待ちあわせていたが、海端^{うみばた}の朝は早く明けて、東海道の入口に往来の人影もだんだんに繁くなる頃まで、庄五郎も来ない、平七もみえないので、藤次郎も不思議に思った。病氣その他の故障が起つたとしても、ふたり揃って違約するのはおかしい。二十一日は大師の縁日であるから、その日を間違える筈もない。ともかくも引つ返して本人たちの家をたずねてみようと思つて、まず手近の庄五郎の門^{かど}をたたいたのであつた。

それを聞いて、お国はいよいよ不安を感じた。亭主の庄五郎はとうに身支度をして出て行つたのである。高輪の海辺は真つ直ぐのひと筋道であるから、迷う筈もなければ行き違いになる筈もない。殊に庄五郎ばかりでなく、平七までが姿を見せないというの

は不思議である。亭主が出て行つたあとで、表の戸をたたいた男の声は平七であるらしく思われたのに、それも約束の場所へは行き着かないらしい。ひと筋道で三人出逢わないのは不思議である。「どうしたんでしょうねえ」と、お国は眉のあとの青いひたいを皺しわめた。「なんぼ何でもおまえさん一人を置き去りにして行くよ
うなことはないでしょう」

「と思うのだが……」と、藤次郎は又かんがえていた。「平公は確かに来たんだね」

「わたしも奥に寝ていたので、顔を見たのじやありませんけれど、どうも平さんの声のようでしたよ」

「それから親方も一度帰つて来ましたよ」と、次八が口を出した。

「あら、親方も歸つて来たの」

それはお国にも初耳であつた。

「わたしも出て見やあしませんけれど、親方の声で平さんは来なかつたかと訊ききましたから、来ませんと云つたら、それつきりで行つてしまいました」と、次八は説明した。

「そうすると、平さんと内の人とは何処かで行き違いになつたんだろうね」と、お国は云つた。

「それが又どこかで出逢つて、いつそ二人で行つてしまおうということになつたのかな」と、藤次郎はやや不満らしく云つた。

「そんな義理の悪いことをする筈はないんですがねえ」と、お国は藤次郎に対して気の毒そうに云つた。「平さんだつて内の人だ

って、あれほど約束して置きながら、おまえさんを置き去りにして行くなんて……」

いつまでも同じことを繰り返していても果てしがないので、藤次郎は念のためにもう一度、大木戸まで引返してみることにした。この押し問答のうちに、近所の家でもだんだんに店をあけ始めたので、お国はもう寝てはいられなくなつて、次八と一緒に店の戸をあけ放した。お国は寝道具を片付ける。次八は表を掃く。そのあいだにも一種の不安が^{たち}お国の胸を陰らせた。平七はともあれ、ふだんから義理堅い質の庄五郎が約束の道連れを置き去りにして行く筈がない。これには何かの仔細がなければならないと彼女は思った。

「庄さんはどうしましたえ」と、平七がぼんやりした顔で尋ねて来た。

「あら、平さん。おまえさん、今までどこにいたの」と、お国はすぐに訊きいた。「内の人に逢あいましたかえ」

「いや、庄さんにも藤さんにも逢あわねえ」

「さつきこの戸を叩いて、内の人を呼んだのはお前さんでしょう」

「むむ」と、平七はうなずいた。「出でがけにここの門かどを叩いたら、

庄さんはもう出たというから、すぐに大木戸へ行ってみると、ま

だ誰も来ていねえのさ。夜は明けねえし、犬は吠えやがる。往来

なかに突つ立っているのも気がきかねえから、海端のあき茶屋の

葭よし簀ずの中へはいつて、積しよんである床うぎ几をおろして腰をかけてい

るうちに、けさはめずらしく早起きをしたせいかな、なんだかうと
うとと薄ら眠くなってきたので、床しょうぎ凡の上へ横になつてついと
ろとろと寝込んでしまった。そのうちに世間がそうぞうしくなつ
て来たので、眼をさますと、もう夜は明けている。となり近所の
茶屋では店をあけはじめ。驚いて忽そうそう々に飛び出したが、庄さ
んも藤さんも見えねえ。こいつは寝ているあいだに置き去りを食
ったのかと、ともかくもこつちへ聞きあわせに来たわけさ。いや、
飛んだ大しくじりをやってしまった」

藤次郎とは違って、かれはもう置き去りを覚悟しているらしいか
つた。

「それが大違い、藤さんも今ここへ尋ねて来たんですよ」

お国から委細の話を聞かされて、平七は狐に化かされたような顔をしていた。そこへ藤次郎がまた引つ返して来て、庄五郎の姿はどうしても見付からないと云った。

「今までは二人に置き去りを食ったかと内々は恨んでいたが、平さんがこうしているのを見ると、そうでもないらしい。まさかに庄さん一人で行きやあしめえ」と、藤次郎も不思議そうに、溜息をついた。

「そうですね……。内の人ひとりで出かけて行く道理がありませんわ。ほんとうにどうしたんでしょうねえ」

不安がいよいよ募って、お国は泣き声になった。

二

その日の夕方に、鑄掛屋庄五郎の死体が芝浦の沖に浮きあがった。検死の役人が出張つて型のごとく取り調べると、庄五郎のからだには何の疵あとも見いだされなかつた。死体を投げ込んだのでないことは、彼がしたたかに潮水を飲んでいるのを見ても容易に察せられた。大師まいりに行くのであるから、もとより大金を所持している筈もなかつたが、一朱銀五つと小銭少しばかりを入れてある紙入れは恙なくそのふとこ^{つつが}ろに残つていて、ほかには何も紛失物はないと女房のお国は申し立てた。

前後の事情によつて判断すると、三人のうちでも庄五郎が真つ

先に約束の場所へ行き着いたらしい。ほかの道連れを待つあいだ、かれは海岸の石垣にでも腰をかけていて、あやまって転げ落ちたのか、あるいは石段を降りて行つて、うす暗い水の上で寝ぼけた顔でも洗い直しているときに、あやまって滑りこんだのか、おそらく二つに一つであろう。そのあとへ平七が来て、誰もまだ来ていないのを見て、あき茶屋の葭簀のなかへはいって寝込んでしまった。又そのあとへ藤次郎が来て、自分は置き去りを食つたのかと疑つて、庄五郎の家へ聞き合わせに行つた——係り役人は先ずこういう意見で、庄五郎の死骸はとどこおりなく女房に引き渡された。その死骸に何の疵もなく、なんの紛失物もないのをみれば、お国もそう考えるよりほかはなかった。

それから二日目の八ツ（午後二時）頃に、庄五郎の葬式は三田の菩提寺で営まれた。藤次郎はふだんからの懇意でもあるので、通夜は勿論、きょうの葬式にも施主側と一緒にいろいろな手伝いをした。平七は庄五郎と同職で、しかも従弟同士であるので、無論に昼夜詰め切りで働いた。

庄五郎は二十八歳を一期として世を去ったが、従弟の平七のほかに是ぞという親戚はなかった。お国も浅草にひとりの叔母をもっているだけで、その叔母が来て何かの世話を焼いていた。年も若し、子供も無し、殊に女には出来ない商売であるから、小僧の次八は平七の方にたのんで、お国は夫の三十五日の済むのを待って、世帯を畳んでひと先ず浅草の叔母の家へ引き取られるとい

うことになっていた。お国さんは容きりよう貌も好し、人間も馬鹿でないから、どこへでも立派に再縁が出来ると近所でも噂うわさしていた。

四月十日の小雨こさめのふる宵であつた。同町の往来で二人の男が喧嘩をはじめた。最初は番傘で叩き合っていたが、しまいには得物えものを投げすてて組打ちになった。まだ宵の口のことであるので、近所の者もそれを見つけて、二、三人がその仲裁にかけ出すと、その男は平七と藤次郎であつた。

「おれは庄五郎の親類だ。死んだあとの世話をするのに不思議があるか」と、平七は云つた。「てめえこそ他人のくせに余計な世話を焼くな」

「おれは他人でも、庄五郎とはふだんから兄弟同様にしていたん

だから、そのあとの世話をしてやるのが義理人情というものだ。

本来ならば手前もお国さんと一緒になつて、どうも御親切にありがとうございますと、おれに礼をいうのが本当だ」と、藤次郎は云つた。

「べらぼうめ。誰がうぬらに礼をいう奴があるか」と、平七はまた呶鳴つた。

このもんちやく捫も著

はお国という若後家を中心として渦巻き起つたらしい。平七はお国と同年の二十三歳で、まだ独り者である。藤次郎は二十七歳で、これも女房におとどし死に別れて今は男やめである。一方は先夫といとこ従弟同士、一方は先夫の親しい友達というのであるから、その亡きあとの面倒をみてやるのはむしろ当然

の義理ではあるが、容貌のよい若後家に対して、ふたりの若い男があまり立ち入って世話を焼き過ぎるといのが、この頃は近所の噂にもものぼっていた。その二人が今夜もお国の家で落ち合つて、その帰り路に往来なかで掴み合いを始めたのであるから、喧嘩の仔細の大かたは想像されるので、仲裁に出る人たちも先ずいい加減になだめていると、暗いなかから不意に一人の男が出て来た。

「おい。二人ともそこまで来てくれ」

「どこへ行くんです」と、藤次郎は訊^きいた。

「番屋までちよいと来てくれ」

番屋と聞いて二人はすこし驚いたが、相手が唯の人らしくないと覺つたので、そのまま素直に町内の自身番へ引つ立てられて行

った。たかなわ高輪には伊豆屋弥平といういい顔の岡っ引があつて、今

はその倅が二代目を継いでいる。平七と藤次郎を引つ立てて行つたのは、その子分の妻吉という男であつた。

「ひとりとは鑄掛職の平七、ひとりは建具屋の藤次郎、それに相違あるめえな」と、妻吉はまず念を押した。

「てめえ達は雨のふる最中に、泥だらけになつて何を騒いでいるんだ」

「へえ。おたがい^{てかず}に気が早いもんですから、つまらないことで喧嘩を始めました。お手数をかけまして相済みません」と、年上だけに藤次郎が先に答えた。

「いや、喧嘩の筋も大抵わかつてゐる。これ、平七。貴様は三月

二十一日の朝、鑄掛屋の庄五郎と一緒に川崎へ行く約束をしたそうだな」

「へえ」

「この藤次郎と三人で行く約束をしたのだそうだが、その朝は貴様が一番さきに行っていたな」

「いえ。出がけに庄五郎の家へ声をかけましたら、もう出で行ったということでした」

「嘘をつけ」と、妻吉は行灯のまえで睨みつけた。「貴様は先に行っていて、それから引返して家へ行ったのだろう。真っ直ぐに云え」

「いえ、出がけに寄ったのでございます」

妻吉は舌打ちした。

「やい、やい。つまらねえ手数をかけるな。なんでも話は早いがいい。貴様は庄五郎の女房のお国という女に惚れているのだろう」
平七は勿論、藤次郎も一緒にうつむいてしまった。ふたりの腋わきの下に冷たい汗が流れているらしかった。

「おれはまだ知っている」と、妻吉は畳みかけて云った。「貴様はこの正月ごろ、町内の湯屋の番頭とお国の噂をして、あの女に亭主が無ければなあと云ったそうだが、ほんとうか」

身におぼえがあると見えて、平七はやはり俯向いたままで黙っている、妻吉は勝ち誇ったように笑った。

「もう、いい。あとは親分や旦那が来て調べる」

平七は六畳の板の間へ投げ込まれて、まん中の太い柱にくくり付けられた。藤次郎は御用があつたらば又よびだすというので、一旦無事に帰された。

三

それから三日^{みっか}ほど後に、芝の愛宕下で湯屋^{ゆうや}をしている熊蔵が神田三河町の半七の家へ顔を出した。熊蔵が半七の子分であることは読者も知っている筈である。

「湯屋熊。久しく見えなかつたな。嬬^{かかあ}でも又寝込んだのか」と、丁度ひる飯を食っていた半七は云った。

「なに、わつしが飲み過ぎて少し腹をこわしてね」と、熊蔵は頭を搔いていた。「時に、あの高輪の一件、あいつは惜しいことをしました。わつしもちつと聞き込んでいたんですが、今も云う通り、からだを悪くしてぐずぐずしているあいだに、伊豆屋の妻吉に引き挙げられてしまいました」

「むむ、鑄掛屋の一件か。おれもその話は聞いたが、なんと云つても伊豆屋の縄張り内だから、先を越されるのは当りめえだ」と、云いかけて半七は少しかんがえていた。「だが、実はまだおれの腑に落ちねえところがある。おめえはあの一件をよく知っているのか」

「ひと通りは知っていますよ」

「露月町の鑄掛屋の平七、そいつが下手人^{げしゆにん}として挙げられたよ
うだが、白状したのか」

「強情な奴で、なかなか素直に口をあかねえそうですが、伊豆屋
も旦那方もおなじ見込みで、もう大番屋^{おおばんや}へ送り込んだというこ
とです」

熊蔵の説明によると、平七が如何に強情を張つても、かれは無^む
垢^くの白地でもどされて来そうもないというのである。かれが庄五
郎の女房お国に惚れていて、あの女に亭主がなければと口走つた
のは事実で、それには証人もあり、本人自身も認めている。庄五
郎が死んだ後に、従弟同士とはいいいながら、彼がなにか何まで
身に引き受けて世話をしているばかりか、まだ三十五日も済まな

いうちにお国の叔母をたずねて行つて、お国も今から後家を立て通すわけにも行くまいと云つた。そうして、どうせ再縁するならば、氣ごころの知れないところへ行くよりも、いつそ親類か同商売の家へ行つた方がよからうなどと云つた。それから考えても、かれが飽くまでもお国に思いをかけていることは明白である。

当日の朝、庄五郎が出て行つたあとで、かれがその門かどを叩いたのは、その犯跡くちを晦くらまそうが為である。実は庄五郎よりも一と足さきに行つていて、あとから来た庄五郎を何かの機会で海へ突き落として置いて、更に引返して来てその門を叩いて、これから出かけて行くように粧よそおつたものであらうと認められた。その人殺しの目的はいうまでもなく、亭主を葬つてその女房を奪おうとす

るにあることは、あの女に亭主がなければと彼が曾て口走つた事
実によつて、明らかに証拠立てられている。殊にその朝、かれは
約束の場所に待ちあわせていないで、あき茶屋の葭簀よしずの中に寝込
んでしまつたなどと曖昧なことを申し立てているのも、ますます
彼のうたがいを強める材料となつた。

元来この事件はさのみ重大にも認められず、最初の検視では単
に庄五郎自身の過あやまち失で海中に転げ込んだものとして、至極手輕
く済んでしまつたのであるが、ここを縄張りとする伊豆屋の一家
ではそのままに見過みすごさないで、一の子分の妻吉が主として探索
の末に、かの平七がお国に恋慕していて、亭主がなければと冗談
のように云つたことを探り出したのが手がかりに、だんだんに探

索を進めて遂に平七を引き挙げるまでに至ったのは、さすがに伊豆屋の腕前であると熊蔵は云った。

その話をきいて、半七は又かんがえていた。

「なるほど、それで大抵わかった。そこで、平七が先ず庄五郎を殺して置いて、それから引返して来て庄五郎の家の戸をたたいて、自分はこれから行くように見せかけた……その段取りは判っているが、聞けば平七が戸をたたいて行つたあとで、亭主の庄五郎が帰つて来て声をかけたというじゃあねえか。平七が殺してしまつたものならば、そのあとへ庄五郎が帰つて来そうもねえものだ。まさか幽霊でもあるめえ」

「いや、わっしも初めはそう思ったが、あとで聞いてみると詰ま

らねえ話さ」と、熊蔵は笑いながら、説明した。

「だんだん調べると、それは藤次郎という奴の冗談だそうですよ」

「冗談だ……」

「ええ。三人のなかでは建具職の藤次郎という奴が一番あとから出て来たんです。そいつが冗談半分に庄五郎のこわいろ声色を使って、

鑄掛屋の門をたたくと、女房は寝入っていて小僧が返事をした。

女房だったならば、何か戯からうつもりだったかも知れねえが、小僧

じゃ仕方がねえので、藤次郎もそのまま行ってしまったんだそうですよ。それは当人の白状だから間違いはありますめえ。こんなつまらねえ冗談をする奴があるので、ときどきに探索もこじれるんですね」

「むむ。そこで、熊。面倒でもその高輪の一件をもう一度、初めからすっかり委しく話してくれ」と、半七は云った。

「まだ腑に落ちねえことがありますかえ」

気乗りのしないような顔をして、熊蔵がぼつりぼつり話し出すのを、半七は薄く眼をとじて黙って聴いてしまった。

「いや、御苦労。おれはこれから少し用があるから、きょうはもう帰ってくれ。ひよつとすると、あしたはお前の家へ尋ねて行くかも知れねえから、家をあげねえで待っていてくれ」

「あい。ようがす」

熊蔵を帰したあとで、半七は長火鉢の前に唯ひとり坐っていた。最初に鑄掛屋の戸をたたいて、「庄さん、庄さん」と呼んだのは、

今度の下手人と目指されている平七の声である。次に鑄かけ屋の戸をたたいて「平さんは来なかったか」と呼んだのは、亭主の庄五郎の声で、実は藤次郎の声色だというのである。最後に戸を叩いて「おかみさん、おかみさん」と、呼んだのは、藤次郎の声である——この三つの声について、半七はいろいろ考えさせられた。「おい、お仙」と、彼はやがて女房を呼んだ。「ちよいと出てくるから着物を出してくれ」

「これから何処へ出かけるの」

「熊のところまで行ってくる。あしたと約束したのだが、思いついたら早い方がいい。このごろは日が長げえから」

まったくこの頃の日は長い。半七が神田の家を出たのはもう七

ツ（午後四時）に近いころであつたが、初夏の上空はまだ青々と明るく光っていた。表には金魚を売る声がきこえた。愛宕下へ行って熊蔵の湯屋をたずねたが、店はもう客の忙がしい刻限であつたので、半七は裏口へまわつてそつと呼び出すと、熊蔵はきよろきよろしながら出て来た。

「親分。早うござんしたね」

「むむ。急に思いついたことが出来たので、すぐに出て来た。これから田町^{たまち}へ案内してくれ」

「庄五郎の家ですか^{うち}え」と、熊蔵はいよいよ其の眼をひからせた。

「親分。なにか当りがあるんですかえ」

「まあ、行つてみなけりやあ判らねえ」

熊蔵に案内させて田町の鍔掛屋へ出かけてゆくと、隣りは小さい下駄屋で、その店との境に一本の柳が繁つて垂れているのも、思ひなしか何となく寂しくみえた。三十五日が過ぎれば世帯をたたむ筈になっているので、店こそ明けてあるが商売は休みで、小僧の次八がぼんやりと往来をながめていた。

「おかみさんはいるかえ」と、熊蔵は訊^きいた。

「奥にいますよ。呼んできましようか」

「呼んでくれ」

手拭で着物の裾をはたきながら、二人が店さきに腰をおろすと、奥では針仕事でもしていたらしく、鈴の付いた鋏を置く音がして、むすび髪の若い女房がすこしく窶^{やつ}れた青白い顔を出した。

「この親分は御用で来なすつたのだから、そのつもりで返事をしねえじゃあいけねえぜ」

お国は熊蔵を識らなかつた。勿論、半七を識ろう筈はなかつた。しかも御用という声をきいて、かれは神妙に店さきにうづくまつた。いたずら小僧らしい次八もおとなしく小膝をついた。

「いや、別にむずかしい詮議をするんじゃないやあねえ」と、半七はしずかに云い出した。「早速だが、おかみさん、あの朝、一番さきに戸を叩いたのは確かに平七の声だったな」

「はい。庄さん、庄さんと呼んだだけでしたが、たしかに平さんの声でございました」と、お国は淀みなく答えた。

「二度目の声はお前は聞かなかつたんだね」

「つい眠ってしましまして……」と、お国はすこし極まり悪そうに答えた。「この次八が返事をいたしたのでございます」

「たしかに親方の声だったか」と、半七は小僧を見かえって訊いた。

「わたしも半分夢中でよく判らなかつたんですが、どうも親方のようでした」と、次八は云った。

「三度目のは藤次郎だね」

「はい。この時にはわたくしが起きていたのでございます」と、お国は答えた。

「藤次郎は外から、おかみさん、おかみさんと呼んだのかえ」

「はい」

「御亭主がいなくなつてから、平七と藤次郎は大層親切に世話をしてくれるそうだね」

お国はすこし顔を紅くして黙つていた。

「こんなことを訊くのも何だが」と、平七は笑いながら云い出した。「お前はどっちかの男のところへ再縁する気があるのかえ」

「いえ、まだ三十五日も済みませんのですから、そんなことを考えたこともございません」と、お国は低い声で云つた。

「それもそうだが……」と、云いかけて平七も俄かに声を低めた。「おい、あの柳のかげに立っているのは藤次郎じゃあねえか」

お国は伸びあがつて表を覗いたが、やがて無言でうなずいた。それと同時に、藤次郎は柳のかげからそつと立ち去ろうとしたの

で、半七は急に声をかけた。

「やい、藤次郎、待て。熊、早くあの野郎をしよびいて来い、逃がすな」

熊蔵はすぐに店から飛び出して、藤次郎の腕を引つ掴むと、かれは案外におとなしく引き摺られて来た。半七はしばらくその顔をじつと睨んでいたが、やがて又にやりと笑った。

「藤次郎。貴様は運のいい奴だな。はは、とぼけた面^{つら}をするな。

平七を身代りにやって、てめえは涼しい顔をして澄ましていちゃあ、第一に天とう様に済むめえ。伊豆屋の妻吉はどんな調べをしたか知らねえが、おれの吟味はちつと暴^{あら}つぽいからそう思え。と、こう云つて聞かせたら、大抵は胸にこたえる筈だ。野郎、恐れ入

ったか」

「それはどういう御詮議でございますか」と、藤次郎はしずかに答えた。「平七の一件ならば、この間から二度も三度も番屋へ呼ばれまして、何もかも申し上げたのでございますが……」

「伊豆屋は伊豆屋、おれは俺だ。三河町の半七は別に調べることがあるんだ。やい、藤次郎。貴様は三月二十一日の朝、なんでこの家の戸うちを叩いた」

「大木戸で待ちあわせる約束をいたしましたので、そこへ行ってみますと誰もまだ来て居りません。しばらく待つて居りましたが、庄五郎も平七も見えませんでしたので、どうしたのかと思つて念のために引つ返してまいつたのでございます」

「その時にここの家の戸は締まっていたな」

「はい。締まっているので叩きました」

「そうして、おかみさん、おかみさんと呼んだな」

「はい」

「それ、見ろ。馬鹿野郎」と、半七は叱るように云った。「問うに落ちず、語るに落ちるとはそのことだぞ」

「なぜでございます」と、藤次郎は不思議そうに相手の顔を見あげた。

「まだ判らねえか。よく考えてみる。約束の庄五郎が見えねえというので、ここの家へ尋ねに来たのなら、なぜ庄五郎の名を呼ばねえ。まず庄五郎の名を呼んで、それで返事がなかったら女房の

名を呼ぶのが当りめえだ。初めからおかみさん、おかみさんと呼ぶ以上は、亭主のいねえのを承知に相違ねえ」

藤次郎の顔色はにわかに変った。かれは吃り^{ども}ながら何か云おうとするのを、押さえ付けるように半七は又云った。

「亭主は貴様が押し片付けてしまったのだから、ここの家にいる筈がねえ。そこで、貴様は女房を呼んだのだ。はは、これだから悪いことは出来ねえ。いや、まだ云つて聞かせることがある。二度目にここの家の戸をたたいたのは、貴様が冗談に庄五郎の声色を使ったのだということだが、そりやあ嘘の皮で、やつぱり本物の庄五郎が引つ返して来たに相違ねえ」

「いえ、それは……」と、藤次郎もあわてて打ち消そうとした。

「まあ、黙って聞け。三人のうち庄五郎が一番先に出て行って、その次に平七がここの家へ誘いに來たのだ。いくら待っても誰も出て來ねえので、庄五郎は引返して尋ねに來たのだが、まだ薄っ暗いので平七と途中で行き違いになつたらしい。それがそもそも間違いのもつで、平七は待ちくたびれて茶店の葭簀よしずのなかで寢込んでしまった。そこへ貴様が來たか、庄五郎が來たか、なにしろ二人が落ち合つて……。それから先は、おれよりも貴様の方がよく知っている筈だぞ。そうして、白ばつくれてここの家へたずねて來た……。どうだ、おれの天眼鏡に陰くもりはあるめえ。來年から大道うらないを始めるから臍負へらにしてくれ。そこで貴様もまさか最初から庄五郎を葬つてしまう氣でもなかったろうが、眼と

鼻のあいだの葭簀のなかに平七が寝込んでいるとも知らねえで、その来るのを待っているうちに、場所は海端、あたりは暗し、まだ人通りも少ねえので、ふっと悪い料簡をおこしたのだろう。可哀そうなのは平七の野郎だ。あの女に亭主が無けりやなんて、つまらねえことを云ったのが引つかかりになつて、伊豆屋の手に引き挙げられたので、貴様はまだ悪知恵を出した。庄五郎が一旦引返して来たなんて云うと、その詮議がまた面倒になると思つて、実は自分が庄五郎の声色を使ったのだといひ加減の出たらめを云つて、なるべくこの一件の埒を早くあけて、罪もねえ平七を人身ひとみ御供ごくうにあげてしまふ積りだったのだらう。はは、悪い奴だ、横着な奴だ。だが、考えてみると貴様も正直者かも知れねえ。一体、

そんなことは知らねえ顔をしていても済むことだ。なまじいに余計な小刀細工こがたなざいくをするから、却つて貴様にうたがいが懸かるとは知らねえか。さあ、ありがたい和尚様がこれほどの長い引導を渡してやったのだから、もういい加減に往生しろ。どうだ」

藤次郎は墓がまがえるのように店さきの土に手を突いたまま身動きもしなかつた。その顔色は藍あいのように染めかえられて、ひたいからは膏あぶらあせ汗あせがにじみ出していた。

「素人しろうとだ。きつかけを付けてやらなけりやあ口があけめえ」と、半七は熊蔵をみかえつた。

「野郎、しっかりしろ」

熊蔵はいきなり平手で藤次郎の横つ面を引っぱたくと、かれは

眼がさめたように叫んだ。

「恐れ入りました」

かれが縄つきで鑄掛屋の店さきから引つ立てられる頃には、四月の日もさすがに暮れかかつて、うす暗い柳のかげから蝙蝠こうもりが飛び出しそうな時刻になっていた。

これに就いて、半七老人はわたしに話したことがある。

「奉行所の白洲しらすの調べもそうですが、わたくし共の調べでも、ぽつりぽつりとしずかに調べて行くのは禁物きんもつです。しずかに云っている、相手がそのあいだにいろいろの云い抜けをかんがえ出したりして、吟味が延びていきません。初めはしずかに調べてい

て、さあという急所になって来たら、一気にべらべらとまくし掛けて、相手にちつとも息をつかせないようにしなければいけません。息をつかせたらこつちが負けです。それですから吟味与力や岡っ引は口の重い人では勤まりません。与力は口だけだからまだいいが、岡っ引は手も働かせなければならぬ。口も八丁、手も八丁とはまったくこのことでしょう。

ところで、相手がこの藤次郎なぞのように素人ならば仕事は仕易いのですが、相手が場数^{ばかず}を踏んでいる玄人^{くろうと}、今日^{こんにち}のことばで云う常習犯のような奴になると、向うでもその呼吸を呑み込んでいるので、こつちの詞^{ことば}が少したるむとすぐに、その隙をみて、『恐れながら恐れながら』と打ちかえして来て、なにか云い訳ら

しいことを云う。それを一々云わせると、吟味が長びくばかりでなく、しまいには変な横道の方へ引き摺り込まれて、ひどく面倒なことになってしまふ^{おそ}虞れがありますから、相手がなんと云おうとも委細かまわずに冠^{かぶ}せかけて、こっちの云うだけのことを真っ直ぐに云ってしまわなければならない。その呼吸がなかなかむずかしいもので、年のわかい不馴れの同心などが番屋で罪人をしらべる時、相手が玄人だとあべこべに云い負かされて、そばで見えてはらはらすることがあります。

それから罪人の横つ面をなぐつたりする。今からみれば乱暴かも知れませんが、玄人は度胸が据^{すわ}っているから、いよいよいけな
いと思えば素直に恐れ入りますが、素人にはそれがなかなか出来

ない。いえ、強情で云わないのではない。云うことが出来ないのです。それも軽い罪ならば格別、ひとつ間違えば自分の首が飛ぶというような重罪が発覚したかと思うと、大抵の素人はぼうつとなつてしまつて、早くいえば酒に酔つたようになって、なんにも云えなくなつてしまうのです。といつて、いつまでも黙らせて置いては埒がうちあきませんから、そういう時には氣つけの水を飲ませてやるか、さもなければ横つ面を引っぱたいてやるのです。そうすると、はつと眼が醒めたようになって、初めて恐れ入るというわけです。たとい悪いことをしても、むかしの人間はみな正直だから、調べる方でもこんなことをしたのですが、今の人間は度胸がいいから、こんな世話を焼かせる者もありますまいよ」

青空文庫情報

底本：「時代推理小説 半七捕物帳（四）」光文社文庫、光文社
1986（昭和61）年8月20日初版1刷発行

入力：tat_suki

校正：小林繁雄

1999年3月25日公開

2004年3月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

半七捕物帳

三つの声

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 岡本綺堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>